

CLOSE UP 令和3年度 男女共同参画週間
安田菜津紀講演会

講座レポート 令和3年度 LGBT理解基礎講座
岡部 鈴さん

インタビュー トキハソース株式会社 代表取締役
田口伊津子さん

特集

— DVによる脳の後遺症に苦しむ女性たち —
DVと貧困の密接な関係

DVと貧困の密接な関係



DVとは、配偶者または事実婚のパートナーなど親密な関係にある男女間における暴力のことを言います。

DVによる脳の後遺症に苦しむ女性たち

ルポライター 鈴木 大介

“貧困と暴力は密接な関係がある”ことはかねてから指摘されています。また、DVで離婚した女性は働きたくても働けない根深い問題があるようです。一体、何が彼女たちを苦しめるのでしょうか。社会の底で最も不可視化している貧困層*をターゲットにその困窮と背景の実態に迫ったルポライターの鈴木大介さんにご寄稿いただきました。* 売春ワークによって貧困を不適切に自己解決している女性

DV被害の女性は離婚すれば自由になる？

極めてシンプルな問いをします。DV被害者であるシングルマザーで、離婚直後から働ける方はいったいどれほどの割合だと思えますか？

かつての僕は、暴力夫の呪縛からようやく解放された彼女らは、それからが新しい人生の始まり。ようやく自由が世の中に羽ばたき直せるタイミングであって、「生まれ直し」のような解放感と自由の中にあると考えていました。将来不安はあれど、少なくとも日々暴力を受け続けてきた日々よりは、自由だろうと…。

けれどいまでは、かつてそのように思っていた自分の浅はかさを恥じ、とても後悔しています。

暴力経験が脳に与える後遺症が離婚後の女性を追い込む

認識が一変したのは6年前(2015年)、僕が脳卒中で倒れ、後遺症として高次脳機能障害の当事者となったことがきっかけでした。高次脳機能障害とは人生の途上で「突然進行した状態の認知症」になるようなもので、当事者となった僕は、日常生活のあらゆるものが壊滅的にできなくなるといふ非常に辛い経験をすることとなりましたが、そんな生活の中で「おおきな既視感」を感じる経験をしたのです。

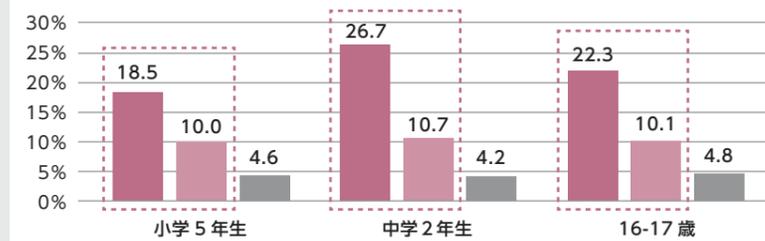
それは病棟の売店レジでの出来事。店員さんの指示する額のお金を出そう

としても、どうしても財布から正しい額の小銭を数えて出すことができず、パニックを起こしてしまつたのですが、これがどうにも既視感のあることなのです。

かつて、取材記者として生活困窮状態にあるシングルマザーに限定したインタビュー取材を集中して行った時期があります。意図してそう選別したわけではないのに、なぜか生活困窮状態からアプローチしたはずの取材対象者は、そのほとんどがDV被害の経験を持ち、そのほとんどが精神科通院のある方々ばかり。けれどその取材の中で、レジ会計時にパニックを起こして小銭を床にばらまいて半泣き状態になる取材対象者に接したことがありましたし、元々頭脳職だった方からも離婚後にうつ病を発症されて上手に会計ができないうんですという訴えを聞き取ったことがあったのです。

これが既視感の正体、嫌な予感がしました。文書を読もうとしても、読んだ文字が頭から流れるように消えていき、意味が分からない。大して難しい内容でもない話を聞いていても、頭の中がどんどん混乱して、理解できない。他者に自分の気持ちを伝

図 「(元) 配偶者(パートナー) から暴力を受けた」と回答した母親の割合



生活困難層… 困窮層+周辺層
困窮層… 子供の生活困難の要素となる、①低所得 ②家計のひっ迫 ③子供の体験や所有物の欠如のうち、2つ以上の要素に該当
周辺層… 子供の生活困難の要素となる、①低所得 ②家計のひっ迫 ③子供の体験や所有物の欠如のうち、いずれかの1つの要素に該当
一般層… 子供の生活困難の要素のいずれにも該当しない

出典：首都大学東京 子ども・若者貧困研究センター「東京都子供の生活実態調査詳細分析報告書」(平成30年3月)

毎年11月12日～11月25日(女性に対する暴力撤廃国際日)は、「女性に対する暴力をなくす運動」期間です。また、毎年1月は児童虐待防止推進月間「オレンジリボンキャンペーン」を実施。パープルリボンとオレンジリボンをシンボルに、全国で様々な啓発活動が実施されています。



たのです。

もしこの不自由が彼女らの訴えていたものと同じならば、僕らとんでもない勘違いをしていたのではないか。生まれ直し？ 解放？ とんでもない！

——脳に何らかのダメージを受けた者には、共通する苦しみや不自由があるのではないか。暴力被害を受けた当事者(極度のストレス経験者)もまた、同じ状況(脳の機能が何らかの理由で阻害されている)にあるのではないか——そんな推論から病後、何冊かの本を執筆しましたが、嫌な予感の中。僕の症状に共感を寄せる読者の中には、暴力被害の経験者が

多数いらつしゃいました。

お手紙やSNSを通じての読者感想を参考に、彼らと病後の僕に共通する症状を一部書き出すと、この様になります。

現実感の喪失(自分がこの世に生きている実感の喪失) / 起きている間ずっと明確な理由のない不安感から気分を切り替えられない / 自分だけがスローモーションの世界に生きているように世界が高速に感じる / 言葉や文章の理解困難 / 自身の状況を説明する能力の喪失 / 致命的な物覚えの悪化 / 時間感覚の喪失 / 身体を使っていなくても訪れる立ち上がれないほどの疲労感

もはや就労どころではありません。離婚後に待つ膨大な行政手続き、債務関係構築、どれ一つとして、自力のみでは遂行不能。ただでさえ子育てと仕事の両立という難題を抱えるシングルマザーに上記のような不自由が重なれば、生活困窮状態に陥らない方がおかしい。病前の僕が生活困窮状態のシングルマザーを取材したらDV経験ケースばかりだったのは、今思えば当然のことだったのです。

誰も置き去りにしない社会になるために

あらためて、親や配偶者からの心身へのDV問題とその後遺症に悩まされて働けない女性たちの実態について、取材をとおして見てきました。現状の日本では、子育て中の女性が「極限まで追い込まなければ離婚できない」条件がそろっていますが、願わくば、暴力被害が認められた時点で即離婚を決定できるサポート体制を。離婚が成立した段階で当事者女性の抱えるリスクを客観的に調査・評価したうえで、貧困化の抑制につながる医療や適切な公的扶助とつながるシステムを整えてほしい。

Profile



すずき・だいすけ

子どもや女性、若者の貧困問題をテーマに「最貧困女子」(幻冬舎)などを代表作とするルポライターだったが、2015年に脳梗塞を発症。その後は高次脳機能障害者としての自身を取材した闘病記「脳が壊れた」「脳は回復する」(いずれも新潮社)や夫婦での障害受容を描いた「されど愛しきお妻様」(講談社)などを出版し、援助職全般向けの指南書「脳コワさん支援ガイド」(医学書院)にて日本医学ジャーナリスト協会賞大賞受賞。共著に「貧困を救えない国日本」(阿部 彰と共著・PHP 研究所)、「不自由な脳 高次脳機能障害に必要な支援」(山口加代子と共著・金剛出版)、「壊れた脳と生きる 高次脳機能障害「名もなき苦しみ」の理解と支援」(鈴木匡子と共著・ちくまプリマー新書)。

令和3年度 北区男女共同参画週間／講演会

フォトジャーナリストが
伝えたいこと

「世界」を知る、「自分」を知る



去る6月12日(土)、北とびあドームホールにて、男女共同参画週間講演会に安田菜津紀さんがご登壇されました。昨年度は中止となり、2年越しの実現です！ ファインダー越しに人々の生活を見つめてきた安田さん。男女共同参画、そして人権という大切な軸で、簡略となりますが、4つのメッセージにまとめてご報告します。

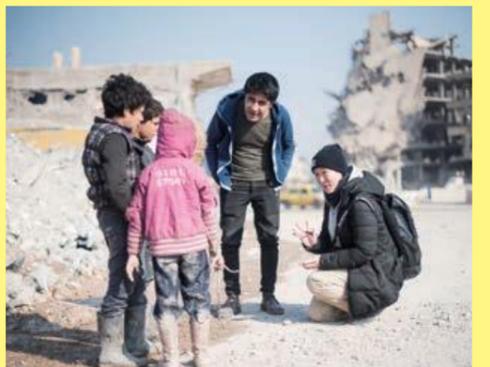
フォトジャーナリスト

安田菜津紀さん

「写真で伝える仕事」を
選んだきっかけ

フォトジャーナリストを志したきっかけは、16歳の時に訪れたカンボジアで人身売買された同世代の子どもたちとの出会いです。皆さんは「トラフィック・チルドレン」という言葉を知っていますか？ この言葉は人身売買の被害にあつた子どもたちをそう呼びます。私はこの被害から保護された施設で暮らす同世代の子たちと一緒に過ごしました。ある時、雑談で好きな子の話題で盛り上がりつつ、先ほどまで一緒に笑っていた私と同じ年の女の子が輪から外れているのです。後になって、彼女が人身売買の被害にあい、性的搾取を強要されていたこと、自分は汚いから人を好きになつてはいけないのだと思つていふことを知りました。頭を殴られたような衝撃でした。女性に生まれただけで、なぜそのようなリスクに晒されなければならないのか、もしあの時、この一連の問題やリスクを知識として知っていたら、もっと違った行動がとれたかもしれない。これから先、このような問題があつた時、「伝える」ことで、誰かと分かち合うことはできるかもしれない——それが今の仕事の原点となっております。「女性なのになぜこの仕事を？」とよく聞かれますが、声を自ら届けることができない女性たちのもとには、女性記者でなければ近づけないような場所もあるのです。

message 1



フォトジャーナリストとして、世界の子どもたちに向き合う安田さん。

入管法について考える
—命を奪われていい人などいない—

名古屋入管施設に収容されていたスリランカ出身のウイシユマ・サンタマリさん(享年33歳)は、体調の悪化を訴えていたにもかかわらず、治療も受けられないうまま、今年3月に同施設で亡くなりました。施設内では様々な人権侵害があつたと指摘されています。また、彼女は日本でも同居していた男性からシビアナDVを受けており、再度被害にあつた危険性があつたので帰国ができませんでした。しかし、彼女の訴えは届けられず、DV被害者として保護されることはなかったのです。どんな背景や立場にあらうと、命を奪われていい人などいません。身近にこのような問題があることを、皆さんにも知っていただきたいとお伝えしました。

message 2

〓 大きい人たちの一人として
私たちができよう

私はシリアでの取材を続けているのですが、十数年前は穏やかな時間が流れている美しい国でした。現在は紛争により、各地で町が破壊され、避難生活を送っている人たちが国内外で1千万人近くいるといわれています。しかし、最初から戦場と呼ばれる場所ではなかったし、難民もいなかった。私たちが同じような日常があつたのです。それが自分たちの力ではどうにもならないような形で粉々に砕かれていく、そこに戦争の理不尽があると感じてきました。また、シリアから難民となつて国外に逃れた女の子たちは、早期結婚やそれによつて教育の機会をなくしている子たちが多くいます。

message 3

陸前高田から心温まる「恩送り」

2011年3月、東日本大震災で津波により多くの犠牲がでた陸前高田。10年間この地に通わせてもらう中で、お世話になつてきた仮設住宅がありました。私との関わりのご縁で、その住人の方たちからシリアの子どもたちに洋服の寄付をしていただいたことがあります。「自分たちは世界中からの支援と支えがあつて、ここまで日常を取り戻してきた。だから今度は恩返しではなくて『恩送り』をしていきたい。ただ、それだけなんです」と話されました。私たちが何かしらの支えを世界の中から受けてきて、その「恩送り」の連鎖の中で、世界は成り立っているのだということ、私はこの陸前高田の特にこの仮設住宅で出会った方々に教えていただいたかと思つています。また、シリアで戦争が始まった年でもある2011年、世界で飢餓を抱えている国がある中で、支援額が一番集まった国はこの日本でした。

message 4



やすだ・なつき

1987年神奈川県生まれ。NPO法人 Dialogue for People (ダイアログフォーピープル/D4P) 所属フォトジャーナリスト。同団体の副代表。16歳のとき、「国境なき子どもたち」友情のレポーターとしてカンボジアで貧困にさらされる子どもたちを取材。現在、東南アジア、中東、アフリカ、日本国内で難民や貧困、災害の取材を進める。東日本大震災以降は陸前高田市を中心に、被災地を記録し続けている。著書に「写真で伝える仕事—世界の子どもたちと向き合つて—」(日本写真企画)、他、上智大学卒。現在、TBS テレビ「サンデーモーニング」にコメンテーターとして出演中。



陸前高田の被災者のおもいや、難民の女の子たちについて丁寧に話す安田さん。

「自分たちのことを本当に苦しめてきたことって、何か知ってる？ 家に爆弾を落とす勢力でもなくて、過激派の勢力でもなくて、これだけのことが起きているのに世界が自分たちに関心を寄せていない、世界は自分たちのことを無視している」と、難民生活を送っている女の子は言いました。国内外で起きている問題に足元から少しずつでも、みなさんの大切な人たちと分かち合つて、関心の輪を広げていただければ、私としては本望に思います。

私は「子どもには、この戦争にどんな勢力が関わっているのかなんてわからないから、大きい人たちが表現するしかなかったのよ」と言いました。私たち大人はなぜこのような世界の情勢を許してしまつているのか、大きい人たちの一人として、私たちに何ができるのでしょうか。

写真を通して、私がこれまでの取材で出会った方々のお話を伝えました。もし今日の話の中で、皆さんの心に刻まれたものがありましたら、身近な方々と分かち合い、関心の輪を広げていただければ嬉しく思います。

性別をこえて 生きるということ

性の多様性から考える ダイバーシティ&インクルージョン

自分らしく生きるため、40代後半で男性から女性として生きる道を選んだ、トランスジェンダーの岡部鈴さん。岡部さんが考えるダイバーシティ&インクルージョンとは——。社会の現在とこれからについて、ご自身のご経験を交えながらお話しいただいた講義内容を一部ご紹介します。

講師 岡部 鈴さん (広告会社 経営企画部長)

性のあり方はグラデーション

女性になることに憧れを抱きながらも諦めていた私に47歳で転職が訪れました。とあるイベントでの女装をきっかけに、「私も女性として生きていけるかも」と再び思い始めたのです。同じ境遇の人々との交流などを経て、悩んだ末に、トランスジェンダーであることを就業先の全社員にメールでカミングアウトしました。LGBTとは、レスビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーの頭文字をとった言葉です。性のあり方は様々であり、グラデーションです。機械的に分類しきれるものでもありません。性自認とは、「自分にとってふさわしいと思う性別」と、私は考えています。男(女)っぽいから、性自認が男(女)であると

いうわけではないのです。

在職トランスと転職トランス

「在職トランス」とは、元々勤めている会社で性別を移行することです。一方、「転職トランス」とは、一旦会社を辞めて、転職を機に行う性別移行のことです。両者には、様々なメリット・デメリットが考えられます(表参照)。在職中の性別移行では、本人は、覚悟と入念な準備をしているでしょう。しかし、突然のことになかなか頭を切り替えられない周囲と、本人との間には、ギャップが生じてしまうことがあるかもしれません。トランスジェンダーであることを伏せて転職した場合、努力して内面や外見を磨いても、その苦勞が周囲に理解されずに埋没してしまう孤独感や、妊娠・出産の話など、避けた

い話題を振られてしまうこともあるでしょう。情報が洩れないかとヒヤヒヤすることもあられるかもしれません。尚、性自認や性的指向については、必ずしもカミングアウトする必要はありません。カミングアウトは余程の信頼を寄せた相手にしかならないものです。もし、あなたがカミングアウトを受けたときは、「信頼してくれてありがとう。何か困っていることはない?」ときいてあげてください。そして、カミングアウトされた情報を、誰とまで共有してよいか確認してください。アウトティングが自殺を招いてしまうこともあります。秘密を守ることは、命に関わることも多々あります。

D&Iが企業にもたらすもの

近ごろ、多くの先進的企業は、こぞ「ダイバーシティ&インクルージョン(以下D&Iと略)」を企業戦略や理念に加えています。ダイバーシティは「多様性」、インクルージョンは「包括・包含」を意味します。大量消費の時代は終わり、人々の目は「ちょっと高くて、あの会社の製品を使いたい」というように、キラリと光る何かがあるものに向かうようになってきました。また、同じ価格・品質ならば、D&Iを実践している会社の製品・サービスを消費者も増えています。働き方改革も進み、気力・体力・根性に頼った価格競争だけでは企業は勝ち残れません。社員や会社の発想力や個性を育む戦略が必要となってきたのです。

D&Iは、リクルーティングにおいても重要です。LGBTに対するサ

ポートのある会社と、そうでない会社では、仮に当事者でなくとも「D&Iを実践している会社の方が働きやすそう」「女性も活躍できるかも」と、考えるひとは多いでしょう。一人ひとりの能力が発揮しやすい環境をつくるD&Iの実践は、従業員・企業の価値向上、優秀な人材の獲得へと繋がります。

ひとは自分と違って当たり前

例えば、「男なのに物事に細かい。女なのに家事が苦手」という風に、偏見や願望などを押し付け、つい「普通」と言う言葉で片づけていませんか? 性に関すること以外でも様々な切り口で見ても、誰だって何かのマイノリティと言えるかもしれません。相手との違いや、個性を大切に感じる磨いてください。まずは、目の前の一人ひとりと向き合い、相手を尊重することからはじめましょう。そうすることで、あなた自身が、そして社会が変わっていくと思うのです。



おかべ・りん

Profile

1963年長崎県生まれ。現在、広告会社 経営企画部長。長崎大学水産学部中退、九州電子計算機専門学校卒業。専門学校講師、プログラマーなどを経て、広告会社に入社。IT部門等を経験後、総務部長に。2012年、トランスジェンダーであることを社内でもカミングアウトし、女性社員として働き始める。2018年、自身の体験を綴った著書が話題になり、同年に「Forbes JAPAN WOMEN AWARD」編集部特別賞受賞。会社員の立場からトランスジェンダーに関する情報を発信している。

旬な人

ソースのような会社でありたい



トキハソース株式会社
代表取締役

田口 伊津子 さん

profile たぐち・いつこ

東京都板橋区在住。大学卒業後父が経営するトキハソースに品質管理として入社。その後、品質管理だけでなく経理・営業も任せ2007年社長に就任。ソースの消費量をあげるべく、2019年にはキッチンカーにて【瀧野川やきそば】の販売を開始。仕事のABCDE (当たり前前のことを馬鹿にしないでちゃんとできる笑顔)をモットーにしている。

滝野川のトキハソース株式会社は、創業大正十二年の東京で一番古いソースの製造会社です。三代目社長として活躍中の田口伊津子さんにお話を伺いました。

創業以来初の女性社長として

二〇〇七年の三代目社長就任当時は、「先代である父のような社長にならなければ」と悩みました。そんなときに息子がくれた、「一〇〇人の社長がいたら、一〇〇通りの顔があるはず」という言葉に励まされ、様々なことを少しずつ積み重ねてきたことで、認めてもらえるようになってきたように思います。

会社を好きになってもいい

長く働けて、「自分の会社だ」と強く社員に思ってもらえる会社をめざしています。その一環の働き方改革では、社員からの意見や知恵をもとに、年次有給休暇の連続取得や、時間単位での取得を可能にしました。社員のスキルを上げて、誰が休んでも仕事を回せるようなシステム作りにも取り組んでいます。また、不満や悪いことへの意見も、「会社は、今はここまでならできるといったように、歩み寄ることが大事だ」と思っています。

伝統の製法を守りながら 挑戦もつづけていく

醤油は生活必需品でも、ソースは、今や嗜好品になってきているかもしれません。特徴を出さないと生き残るのは厳しい業界です。当社では、主原料に生野菜を使い、こだわりの手作り製法を守り続けながら、少しずつ変化させていきたいと考えています。

創業一〇〇周年まであと二年。「振



工場横にある、お客様と社員の声で実現したソースの自販機は、コロナ禍でも好評。



トキハソース株式会社
北区滝野川 7-39-8
営業時間 9:00 ~ 16:30
定休日 土・日・祝日
電話 03-3916-7181

*原材料調達から消費までの安全・安心を確保する総合的な食品安全の国際規格。

スペースゆう相談窓口

相談はすべて無料です。秘密は厳守します。
詳しくは、ホームページをご覧ください。

こころと生き方・DV相談(予約制)

パートナーからの暴力、家族との関係、職場や学校でのセクシュアル・ハラスメント、人間関係やLGBTなど、生きていく上での悩みや問題について、相談に応じます。

対象：女性 面接相談 50分 電話相談 30分 ※女性の専門相談員が応じます。

火曜日 毎週 10:00~16:50 6枠	金曜日 第1・3・5 10:00~15:50 5枠
水曜日 第1・5 15:00~19:50 5枠	土曜日 第1・3 10:00~11:50 2枠
第2・4 13:00~17:50 5枠	第2・4 10:00~15:50 5枠
第3 10:00~19:50 7枠	日曜日 第1・3 10:00~15:50 5枠

対象：男性 電話相談のみ 30分 木曜日 第1 16:00~19:30 5枠
※男性の専門相談員が応じます。 土曜日 第3 13:00~16:30 5枠

女性のための法律相談(予約制)

離婚、財産相続、雇用・労働上のトラブルなど、身のまわりで起こる様々な問題に対して、法律的観点から相談に応じます。※相談は一人年度内2回までです。

対象：女性 面接相談のみ 30分 木曜日 第3 17:00~19:15 4枠
※女性弁護士が応じます。 土曜日 第1 9:30~11:45 4枠

一時保育

相談時に1歳~未就学児のお子様の保育を希望される方は、相談日の10日前までに予約してください。

手話通訳者派遣

相談時に手話通訳を希望される方は、相談日の10日前までに予約してください。

外国語通訳者派遣

相談時に外国語通訳を希望される方は、相談日の7日前までに予約してください。

＜対応言語＞ タイ語、タガログ語、中国語、ポルトガル語、スペイン語、英語
※その他の言語は要相談

相談方法

事前にお電話やスペースゆうの受付にてご予約の上、お越しください。

問合せ予約

☎ 03-3913-0163

火曜~土曜日 9時~21時
日曜日 9時~17時
(祝日・年末年始・施設点検日を除く)



北区DV専用ダイヤル(予約不要)

DV相談・支援強化のための専用ダイヤルを開設しています。専門の相談員が対応します。

☎ 03-3913-0015
相談日 火曜~金曜日 9時~12時及び13時~17時
(祝日、年末年始、施設点検日を除く)

にじいろ電話相談(予約不要)

性的少数者(セクシュアル・マイノリティ、LGBT等)が抱えている悩みの解決に向け、専門の相談員が対応します。ご本人だけでなく、家族・友人・先生などもご利用いただけます。※お一人20分程度のご相談となります。

☎ 03-3913-0162
相談日 土曜日 第1 14時~17時
木曜日 第4 17時~20時
(祝日、年末年始、施設点検日を除く)

Book Review —ブックレビュー—

情報コーナー新着図書紹介

情報コーナーでは、男女共同参画に関する資料をおひとり2点まで2週間貸出しています。ぜひご利用ください。



多様な社会はなぜ難しいか
日本の「ダイバーシティ」進化論
水無田気流 著
日本経済新聞出版

#Me Too、男性育休、五輪組織委員会問題などの分析に加え、公式な意思決定の場における女性の不在や、無意識の偏見などにも言及。マイノリティの発言も尊重し合い、協業できる社会をつくるために必要なことは、硬直化した社会に一石を投じる一冊。



上司と部下のメンタルヘルスマネジメント対策
松本桂樹、榎本正己 著
税務研究会出版局

パワハラ防止法の改正により企業に求められる対応や、ウィズコロナの時代に重要度を増すテレワークにおける上司と部下のラインケアなど、職場のコミュニケーションやメンタルヘルス対策について、相談事例から作成した架空事例をポイントとともに紹介。



おとめ六法
上谷さくら、岸本学 著
KADOKAWA

憲法・刑法・民法などの六法に加えて、DV防止法、男女雇用機会均等法など、女性が巻き込まれやすいトラブルに関する法律を掲載。解説・事例・手続き方法を、ポイントを交えながら解説。「わたしが悪いのかな」と、諦めてしまう前に手に取ってほしい一冊。



女の子だから、男の子だからをなくす本
ユン・ウンジュ 著/イ・ヘジョン 絵
すみみ 訳/エトセラブックス

「女の子だから、男の子だから」と一体誰が決めたのか。豊富なシチュエーションを描いたカラフルな絵と平易な文体で、固定的ジェンダー規範や性差別的価値観からの脱却を促し、これからの社会を担う子どもたちの自由と可能性に気づかせてくれる絵本。

スペースゆう (北区男女共同参画活動拠点施設)

所在地：〒114-8503 東京都北区王子1-11-1 北とぴあ5階
開館日：火曜日~土曜日(9時~21時)、日曜日(9時~17時)
休館日：月曜日(祝日と重なるときは翌日も休館)、祝日、年末年始

TEL: 03(3913)0161
FAX: 03(3913)0081
Eメール: danjo-c@city.kita.lg.jp



スペースゆう
ホームページ



ゆうレポート
バックナンバーは
こちらから